

全国各地の部隊から…熊本地震・災害派遣

4月14日の前震と16日の本震により、熊本県益城町で震度7、熊本市で震度6弱を計測する等、熊本県から大分県にかけて甚大な被害をもたらした「平成28年熊本地震」から1ヶ月が経過した。

その間、自衛隊は小川清史西部方面総監を指揮官とするJTF（統合任務部隊）を編成し、全国の陸海空自派遭部隊が最大2万6000名規模で人命救助・不明者捜索・生活支援等活動を行った。また、2011年の東日本大震災以来2回目となる、即応予備自衛官を招集し、地域に密着した支援活動を実施した。4月18日から米軍普天間基地所属の輸送機MV-22オスプレイ2機が南阿蘇村に生活物資を届ける等、米軍からの輸送支援も受けた。

5月9日、中谷元防衛大臣は物資輸送と給水等の要請がピークを過ぎたこと

をふまえ、JTFの解散命令を発出した。「今後は西部方面隊を中心とした1万3000名態勢で活動を継続し、引き続き地域のニーズに従って支援を行いたい」と述べた。

5月9日現在、派遣人員は54万1200名、航空機214機、艦船300隻（いずれも延べ数）。人命救助・行方不明者捜索16名、患者輸送約510名、安全確保のための人員輸送約730名、道路の啓開約16キロメートル、物資輸送は毛布約4万2300枚、飲料水約100万3000本、日用品約5万3000箱、食料品約175万5300食、給食支援90万6900食、給水支援1万870トン、入浴支援11万5400名、天幕支援30張、医療支援約2320名、瓦礫の搬出トラック約160台分、エコノミー症候群対策約20張（全て累計）。

「地元熊本のために」即自招集

熊本県を震源とする相次ぐ地震に対応するため、4月17日、東日本大震災以来2回目となる「即応予備自衛官」の派遣が閣議決定された。

熊本地本（本部長・勝井省二1陸佐）は、事態に迅速に対処すべく、発災直後より安否確認、出頭者の把握・調整、企業への依頼・説明を実施するとともに、20日までに即応予備自衛官46名に対し、災害招集命令書を送付した。

命令書を受領した即応予備自衛官は、自宅や職場が震災の影響を受けているにもかかわらず、「地元熊本のために、即応予備自衛官としての自分の任務を必ず完遂します」「即応予備自衛官として、今がまさにその時だと思っています。理解していただいた職場の皆様や背中を押してくれた家族のためにも、精一杯がんばります！」と話していた。

また、予備自衛官からも「いつでも災害派遣に行きます！」「次は私に！」という問い合わせが多数あり、精強「熊本リザーブ」の心意気が伝わり、大変頼もしい限りである。

▶即応予備自衛官編成完結式

4月25日に北熊本駐屯地にて、即応予備自衛官編成完結式が実施された。

西部方面隊各部隊に所属する即応予備自衛官162名は、第24普通科連隊（連隊長稲田裕一1陸佐＝えびの）に配属され、約10日間に及ぶ災害派遣活動を熊本市及び益城町等で実施した。活動内容は、主に給水支援、入浴支援等住民への生活支援だった。

編成完結式に臨んだ即応予備自衛官は、皆大変漂々しく、緊張感に満ちた表情の中にも、任務を完遂させるという揺ぎ無き意思を感じさせた。



災害招集命令書を手渡し



編成完結式で決意をあらたに

編成完結式に臨んだ即応予備自衛官は、皆大変漂々しく、緊張感に満ちた表情の中にも、任務を完遂させるという揺ぎ無き意思を感じさせた。

また、予備自衛官からも「いつでも災害派遣に行きます！」「次は私に！」という問い合わせが多数あり、精強「熊本リザーブ」の心意気が伝わり、大変頼もしい限りである。

目的地変更、FTCから熊本へ!

16日早朝、FTC訓練のため北富士演習場に向かう筈だったが支援隊基幹の第4中隊は、災害派遣要請のため目的地を熊本県に変更し出発した。

集合時、今村3佐（第4中隊長）は、「FTC訓練ができないのは残念だが、気持ちを切り替えて被災者を救助していくぞ」と力強く鼓舞し、隊員の士気を高揚した。



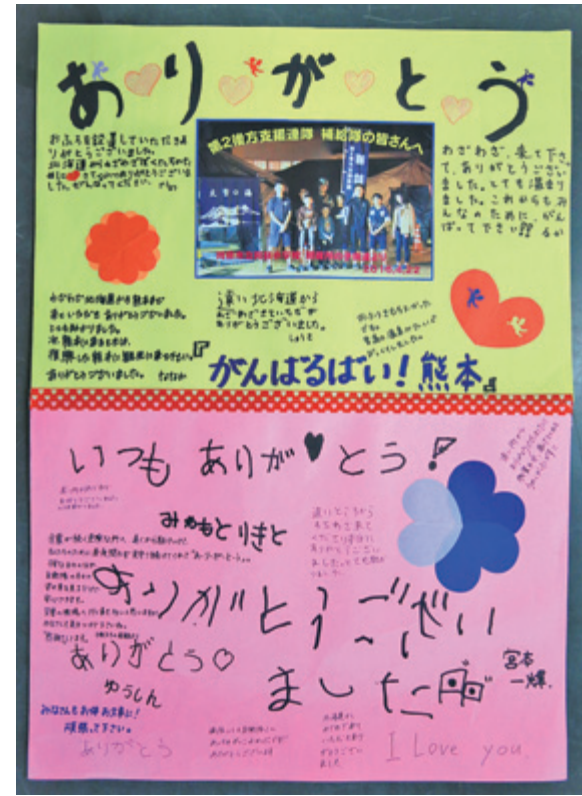
連日、本部長以下で作戦会議を実施した

航空自衛隊



航空自衛隊は、熊本地震発生21日後に築城基地のF-12を離陸させたのを皮切りに、輸送・給食・給水・がれき撤去などの支援や慰問などを行った

「ありがとう」を励みに



災害派遣隊員家族説明会

米子駐屯地（司令・小見明之1陸佐）は、4月29日・30日の2日間、4月14日に発生した「平成28年熊本地震」災害派遣に伴う家族説明会を実施した。

この説明会に34家族、60名が参加した。小見司令は「現地において、隊員は非常に厳しい環境の中で活動しました。家族が隊員の活動を知り、安心する事で隊員も任務に専念出来る。本日は災害派遣活動状況の他、家族支援施策について説明致します」と挨拶、その後藤井副連隊長が自衛隊の活動状況、災害への備え、自衛隊・米子駐屯地の家族支援の内容を説明した。

説明会に参加した家族から「分かりやすく説明して頂いて、隊員の苦勞を深く感じる事が出来ました」「家族支援の説明を受けて、隊員家族同士の繋がりやネットワークを作る事が大切だと思いました。残された家族で共有できるシステムがあると良いと感じました」等の感想を頂いた。

また、会場付近に災害派遣活動場面のパネルを展示するとともに一時予供開所を開設。隊員が安心して任務を遂行できるように様々な留守家族支援が行われている



隊員が安心して任務を遂行できるように様々な留守家族支援が行われている

被災者目線の生活支援



豪雨の中で第2生活支援隊の入浴支援

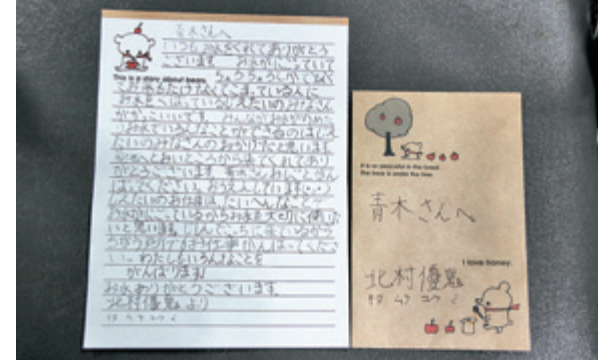


需品教導隊
（松戸駐屯地）



被災者目線で快適なサービス

被災者からの感謝の手紙、続々と届く



親子で災害派遣出動

勝谷和広3陸佐(51)は、中部方面総監部訓練幹部、第8普通科連隊第3科長と勤務をこなし、ほとんど家に帰ることなく自分のことは捨て置き、部隊の為、国民の為に朝早くから深夜まで任務に邁進した。

そんな父の背中を見て育った娘の勝谷夏葵士長(20)は、父が自衛隊を進めたわけでもないのに自ら自衛官を志願し、父が単身赴任中の平成27年3月父と同じ道を選んだ。

娘の夏葵士長は、平成27年9月に新隊員教育を終え、地元広島県の海田市駐屯地にある第13通信隊搬送小隊の配属となった。また父親の勝谷3陸佐は、平成28年3月、約9年間の単身赴任生活を終え、同じく海田市駐屯地にある第13旅団司令部総務課長として赴任した。

父親の海田市駐屯地への赴任を契機に同じ駐屯地で勤務することとなった親子だが、時々顔を合わすたびに少し気恥ずかしさを感じているところだった。

そこへ襲ったのが平成28年熊本地震だった。4月16日午前1時25分、再び熊本県益城町を震度7の揺れ(本震)が襲った。勝谷3陸佐は、同日速やかに南阿蘇村へ災害派遣出動し、現地において総務課長として広域多岐にわたる業務を実施した。夏葵士長は4月25日にグリーンピア南阿蘇に到着し翌26日から活動を開始した。

勝谷3陸佐は、久々に広島に帰る週末の娘の外出の際には親子でやっとゆっくり話ができると思っていたところへの災害派遣出動。結局週末の夢はまだかなわずというところであったのだが、娘の災害派遣出動を機に現地において再会となった。

この写真を撮影したのは、夏葵士長が現地に入った25日。久々の再会であったが、お互い多忙なため、再会時間は約5分程度。夜の空いた時間を見計らって撮影した。別れ際に「体に気を付けて頑張って」とほかにみながら娘にエールを送った。



親子で被災者支援にあたった



5月9日、中谷大臣を表敬した蒲島知事（右から2人目）

献心的なご努力に感銘 蒲島熊本県知事

この度の地震で自衛隊の方々にご尽力頂き、献身的なご努力に対し、皆大変感銘を受けています。人命救助はもちろんのこと、行方不

明者の捜索から避難されている方々への給水・給食・入浴等の生活支援全てに自衛隊の方が取り組んでくれて、お世話になりました。

22日早朝、第36普通科連隊（連隊長・鹿子島洋1陸佐＝伊丹）第4中隊を基幹とする支援隊は、熊本城彩苑で全国から集まった支援物資を各地の避難所に輸送した。

避難所の一つ、熊本県立済々黉高校に到着後、支援に来ていたボランティアの方々と共に作業で支援物資を選び込んだ。

また西志志市体育館では、第5中隊が支援物資を自衛隊車両及び民間乗用車に積載して温泉センター・ウィナスまで輸送した。到着後、民間企業の作業員と協力して支援物資を搬入した。

整齊と任務遂行するさぶろく戦士の姿勢を見て、同じく輸送業務を行う民間企業の方々から、「自衛隊さんが来てくれると大変頼もしいです」と、激励を受け、更に物資を握る手に力が入った。無事に任務を終えた5中戦士の額には、爽やかな汗が光っていた。



支援物資の運び込み

民間人と共同作業



民間企業やボランティアたちと共同作業を行った

24時間態勢で初動対処

4月14日、鹿児島県内においても震度4が観測された。

鹿児島地本（本部長・敷嶋章1海佐）は、緊急事態発生に対処すべく、直ちに鹿児島県庁にLO（連絡要員）を派遣するとともに、全部員を呼集し情報所を開設し、情報収集を開始した。

鹿児島県庁においても、県の関係職員が続々と登庁し、慌ただしく電話対応等に追われている中、当地本LOは、本部情報所及び陸上自衛隊第12普通科連隊（国分）LOと連携して得た情報等を県危機管理防災担当参事（陸自OB）に情報提供するとともに、現地被災状況等について相互に情報を共有し、24時間態勢で緊急事態の初動対処にあたった。

鹿児島県内所在の部隊においても、海上自衛隊第1航空群（P-3C）が情報収集のため、同日22時19分には鹿屋基地を離陸、陸上自衛隊第12普通科連隊（国分）及び第8施設大隊（川内）も、全所属隊員が集結し出動準備の態勢を確立するとともに、熊本地区へ次々と前進し、人命救助、医療・生活支援等の災害派遣活動が開始された。2日後の16日1時25分頃には、同じく熊本地方を震源（マグニチュード7.3）とする本震と考えられる地震が発生し、再び最大震度7を観測した。その後も、熊本県から大分県にかけて広域で余震が継続したことから、鹿児島地本は、非常勤態勢を継続し24時間態勢で情報を収集するとともに、敷嶋本部長の指揮下、いかなる状況にも即応し得るよう、全職員が一丸となって、連日、災害対処に臨んだ。